

クマ類の保護管理に関する重要課題と対応の方向性

基本認識

- 過去 20 年以上にわたる保護管理施策の取組は、クマ類の個体数を維持、回復させ絶滅した地域個体群はない。
- 2000 年以降、大量出没とそれに伴う大量捕獲が起きている。
- 全国的に人家周辺等への出没がみられ、人との軋轢が増加しつつある。
- 他の鳥獣に比べ農林業被害への割合は低いが、人身への被害がある。
- 特定鳥獣保護管理計画制度の定着化がみられる。
- 地域個体群ごとに保護管理を行う必要がある。
- クマ類の保護管理は、地域個体群の将来にわたっての維持であるが、最も重要な緊急の課題は人との軋轢を軽減することである。したがって、新たな分布拡大域（特に、市街地等）の管理を行う時期にきている。
- ただし、無計画な捕獲を行うことは、著しい地域個体群の衰退につながるおそれがある。
- 近年のシカ、イノシシの捕獲推進のためのわなの架設数の増加による錯誤捕獲の問題

主要課題と対応の方向性

- ・ 最も重要で優先的対応が必要だと考えられる課題に絞って提示した。
- ・ 基本的に都道府県による対応を想定している。国レベルでの課題に関しても表記した。

課題 1

管理目標の 1 つである「個体群の維持・回復」を評価することが難しい

- ⇒ 目標を数値化（パラメーター）する
- ⇒ 生息調査の低コスト化
- ⇒ 生息動向（モニタリング調査）の簡便、行政で実施可能な手法の開発等

課題 2

人身被害が深刻な問題であることから、人間活動域への分布拡大防止（里山排除地域の設定等）対策が必要

- ⇒ 関係省庁/部局間の連携強化
- ⇒ 土地所有者・地域住民への普及啓発
- ⇒ コスト、人材の確保
- ⇒ 技術手法の開発

課題 3

大量出没が起こることを前提とした管理手法の検討が必要

- ⇒ 推定生息数・動向把握の問題（安価で、生息数に比例関係の指標検討）
- ⇒ 運用方法の検討（基準・算出根拠等）
- ⇒ 学習放獣の対応
- ⇒ 狩猟、有害鳥獣捕獲、個体数調整による捕獲の組み合わせ

課題 4

広域保護管理の取組が十分進んでいない地域がある

クマ類は行動圏が広い動物であり、地域個体群ごとに個体数水準の規模や大量出没状況等、地域個体群ごとに細かい管理を必要とする動物である。

- ⇒ 国/地方自治体の連携強化
- ⇒ 広域保護管理指針の推進（メリットの提示）
- ⇒ 保護管理コスト低下・効率化へ
- ⇒ 地域個体群として同一の施策、対策の必要性

課題 5

モニタリングを含む保護管理に要する経費の確保が困難（既存予算も縮小傾向）

- ⇒ 国/地方自治体の努力強化（例：予算当局への対策効果の適切な説明など）
- ⇒ 広域保護管理指針の推進（メリットの提示）
- ⇒ 技術開発

課題 6

その他

- ・シカやイノシシの捕獲強化に伴う錯誤捕獲発生への対応
 - ⇒ 適切な放獣手法の開発
 - ⇒ 放獣体制の整備
- ・捕獲に対する社会的コンセンサスが得られにくい
 - ⇒ 科学的情報に基づく普及啓発の推進